

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380208

研究課題名(和文)「アメリカの社会科学」を超えて：20世紀国際秩序観の再検討

研究課題名(英文) Beyond "American Social Science": Reconsidering Ideas of International Orders in the 20th Century

研究代表者

葛谷 彩 (KUZUYA, Aya)

明治学院大学・法学部・准教授

研究者番号：90362558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀のさまざまな地域に現れた多様な国際秩序構想を、国際政治思想史と外交史の両面から比較検討することで、アメリカの社会科学として確立した国際関係論を批判的に再検討するものである。研究を通じて以下の二つの知見を得た。一つは「アメリカの社会科学」を超える試みがしばしばその再生産につながるという震への気づきであり、もう一つは国際政治思想史と外交史のメンバーとの対話を深める中で、「歴史的」視点と手法の可能性を再確認したことである。今後は「国際関係論(IR)」自体を相対化する必要から、「IR」成立以前の19世紀末まで射程を広げ、国際秩序観を研究する手法としての歴史の可能性を追究したい。

研究成果の概要(英文)：The object of this research is to critically reconsider "International Relations (IR)" as an American social science by reviewing various ideas of international order in various regions in the 20th century from viewpoints of both History of International Thoughts and History of Foreign Relations. Through this research we have reached the two findings as follows; Firstly we recognized that a plenty of research trying to relativize "American social science" are likely to end up in its reproduction by doing so. Secondly we reconfirmed the potentiality of "historical" perspective and method through dialogs between members of History of International Thoughts and those of History of Foreign Relations.

Based on them we will extend our perspective back to the time before the genesis of "IR", the end of the 19th century, and examine the potentiality of History as a method for studying ideas of international orders

研究分野：国際政治学、ドイツ国際政治思想

キーワード：20世紀国際秩序 国際関係論 国際政治思想 外交史 アメリカの社会科学

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った経緯：「アメリカの社会科学」としての国際関係論に対する批判的視座

研究代表者の葛谷は、シュペングラーの文明論から戦後西ドイツの国際関係論を経て、1990年代のドイツのリアリズム論に至る、20世紀ドイツの国際政治思想を研究してきた。その中で認識したのは、第二次世界大戦後に冷戦の本格化の中で超大国となったアメリカが一方にあり、その対外戦略の指針として確立されたリアリズムを中心とする「アメリカの社会科学」(Hoffmann(1977))としての国際関係論が他方にある中で、20世紀ドイツの国際政治思想が両者に対する知的格闘として展開されてきたことであった。国際関係論が第一次世界大戦の衝撃によって誕生したことからわかるように、そこには知的営為と政治的現実の間の強い連関が存在する。冷戦の終焉とグローバル化の進展という世界政治の大きな変容は、かかるアメリカ的国際関係論の批判的再検討と、これまで忘却と批判の対象であったドイツ国際政治思想の再評価と多様な国際政治思想の系譜への関心をもたらし、言い換えれば、ネオリアリズムに代表されるアメリカの国際関係理論が、普遍化(グローバル化)とそれに並行して起きた個別化(民族や宗教的原理主義や国家資本主義の台頭など)の相克、さらにアメリカの一極支配の後退に対処できなくなっているのである。すなわち、理論の一般化・抽象化を志向してきたアメリカの国際関係理論が、対象の個別性を見る視点を欠いてきたとして、現在求められているのは、それを補う方法としての歴史への視座であり、そこで検討の対象となるのは、20世紀の知的・世界政治的ヘゲモンとしてのアメリカと向き合ってきた多様な地域の国際秩序観である。本研究では、かかる問題意識を共有する国際政治思想史と外交史の若手研究者が

結集し、主として20世紀の異なる地域で生じた多様な国際秩序観を検討することで、アメリカ一極支配後の複雑化する世界を理解し、新たな国際秩序を構想するにあたっての示唆を提供することを目的とする。

(2) 国内外の研究動向：アメリカ以外の国際関係論に対する関心、地域的偏向と歴史性の不足

こうした問題意識は海外でも顕著であり、国際関係論におけるアメリカのヘゲモニーに対して、アメリカ以外の国や地域で国際関係論がどのような理論的發展を行ってきたかを扱った研究は、近年多数出されている(Tichner/Waever(2009), Acharya/Buzan(2010))。また歴史上のさまざまな国際秩序構想を扱った研究も盛んである(Buzan(2004))。しかし前者はアジアや中東など様々な地域を対象としているものの、アメリカ国際関係論との相互作用に対する考察に欠けるきらいがあり、総花的印象に止まっている。後者については、巨視的な議論に傾倒しており、20世紀アメリカの国際関係論の問題に正面から取り組んでいるとは言えず、具体的な国際秩序観の多様性を捉えきれていない。

わが国でも近年国際秩序観や構想を扱った研究が活況を呈している(佐藤・前田(2009/2010)、大賀・杉田(2008)、遠藤(2010)など)。とについては現在の問題が中心として扱われ、歴史的視点に乏しいきらいがある。については歴史と思想の双方の観点に目配りした好著であり、本研究の問題意識に近いものであるが、扱われている国際秩序観が英米に偏っており、「アメリカの社会科学」としての国際関係論に対する批判的検討という問題関心にとっては聊か物足りない。そもそも我が国の国際政治学は歴史的研究と地域研究の多さをその特徴とするにもかかわらず、その長所が国際秩序観についての研究に活かされていないように見受

けられる。本研究では、外交史と国際政治思想史からアプローチし、フランスやドイツの大陸ヨーロッパや日本などのアジアの国際秩序構想をも取り上げることで、以上の欠陥を補うものである。

引用文献

Stanley Hoffmann (1977), "An American Social Science: International Relations," *Daedalus* 106 (3): pp.41-60.

Arlene B. Tichner/Ole Wæver (eds.) (2009) *International Relations Scholarship Around the World*, Routledge.

Amitav Acharya/ Barry Buzan (eds.) (2010) *Non-Western International Relations Theory: Perspectives on and beyond Asia*, Routledge.

Barry Buzan (2004) *From International to World Society? English School Theory and the Social Structure of Globalization*, Cambridge University Press.

佐藤幸男 / 前田幸男 (編) (2009-2010) 『世界政治を思想する』 国際書院

大賀哲 / 杉田米行 (編) (2008) 『国際社会の意義と限界 理論・思想・歴史』 国際書院

遠藤乾 (編) (2010) 『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』 有斐閣

2 . 研究の目的

本研究は、20世紀のさまざまな地域に現れた国際秩序構想を、外交史と思想史の両面から比較検討することで、「アメリカの社会科学」として確立した国際関係論を批判的に再検討するものである。本研究の目的は以下の二つである。第一は、国際秩序観をめぐる外交史的・思想史的研究に関する文献・史料を収集・整理し、これを紙媒体およびウェブ媒体で公開することによって、国際秩序研究のインフラを整備することである。第二は、国際関係論が知的営為であると同時に現実の政治への応答であることを手がかりとして、アメリカ一極支配後のグローバル化・多極化

する世界の把握に向けた視座を提供することである。

3 . 研究の方法

本研究は、20世紀のさまざまな地域に現れた多様な国際秩序構想を、国際政治思想史と外交史の両面から比較検討することで、アメリカの社会科学として確立した国際関係論を批判的に再検討するものである。基本的な研究方法は、重要な一次史料・二次文献の収集・整理・公開、個別研究の深化、各研究の比較・総合である。とりわけ本研究の特色は、緊密な情報交換と異なる手法間の相互対話である。ウェブを通じた日常的な意見交換を前提に、全員が集まる研究会合を年2回、計6回行う。さらに年に1回はコメントーターを招き、そのレビューを研究過程に織り込んでいく。研究成果については、研究会発表、学会報告そして最終的には書籍公刊の形で公開し、社会と学界への還元を行う。

4 . 研究成果

(1) 2015年度日本国際政治学会研究大会にて部会報告「古典的国際政治論の『英国学派』からの解放」(西村邦行・葛谷彩・宮下豊)を行なった。

本報告では、「アメリカの社会科学」としてのIR(国際関係論)を超える試みが陥る罫、すなわち、「アメリカの社会科学」を相対化しようとして、逆にその再生産に寄与することを、イギリスの歴史家であり、古典的国際政治論の学者であるH・バターフィールドを事例として、彼を「英国学派」に含めることの問題性を明らかにすることで指摘した。

各自の報告タイトルは以下の通りである。西村邦行「なぜ「アメリカの社会科学」に抗すべきでないか 記号としての英国学派とその限界」、葛谷彩「H・バターフィールドと高坂正堯の国際政治論 ドイツの知的伝統の視点から」、宮下豊「現状の防衛という自己義認 H・バターフィールドの政治的判断に

ついて」

本報告について、わが国の国際政治学界でこれまで「英国学派」の創始者のひとりという認知しかされず、かつその業績があまり知られていないH・バターフィールドを取り上げたこと、かつ彼を「英国学派」に含めることの問題性を、アメリカや日本の古典的国際政治論の学者との比較から浮き彫りにした手法が当日のフロアから高く評価された。国際政治思想の多国間比較の可能性ならびに非西欧圏でありながら戦前からの欧米の知的伝統の蓄積があるわが国からの貢献の可能性を感じさせるものであった。

(2) 『「アメリカの社会科学」を超えて：20世紀国際秩序観の再検討』と題した論集の刊行に向けて準備中である。

同論集は2017年3月に晃洋書房より刊行予定である。

(3) 今後の展望

本研究において以下の二つの知見を得た。一つは、上述した「アメリカの社会科学」を超える試みが却ってその再生産につながるという畏への気づきであり、もう一つは、国際政治思想史と外交史の若手研究者の間で対話を深める中で「歴史的」視点と手法の可能性を再確認したことである。以上の知見を踏まえて、昨年申請した共同研究計画（「国際関係論」からの解放 「IR」から「歴史」への回帰）が今年度基盤研究（C）で採択された。同研究では、「アメリカの社会科学」という対象を超えて「IR」事態を相対化する必要から、19世紀末に遡って「IR」以前の国際秩序をめぐる研究（「外交史」

「国際法」「地政学」など）をも射程に入れることで、「IR」の本来持っていた豊かな可能性を再発見し、これを活性化する手がかりを歴史的な手法に求めることを目指している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

2013年

小窪千早、ドゴールと欧州構想 「大西洋からウラルまでのヨーロッパ」に関する一考察、国際関係・比較文化研究、査読無、12、pp.131-141.

Tetsuji Senoo, "A Small Step toward a 'German Europe'? Germany, the Ostpolitik and Europe," *Challenge of the 21st Century and the Region*, 査読無、1、pp.73-79.

三牧聖子、『世界最高裁』の夢 20世紀転換期アメリカの『法律家的』平和主義の思想史的検討、国際法外交雑誌、査読有、112、pp.80-106.

西村邦行、日本の国際政治学形成における理論の「輸入」 E・H・カーの初期の受容から、国際政治、査読有、175、pp.41-55.

山中仁美、戦間期イギリスの国際関係研究における「理論」 チャタム・ハウスにおけるナショナリズム論をめぐる、国際政治、査読有、175、pp.14-26.

2014年

板橋拓己、ドイツとイスラエルの「和解」道義と権力政治のはざままで、アジア太平洋研究、査読無、39、pp.111-127.

葛谷彩、アーノルド・J・トインビー『歴史の研究』 比較文明学と国際政治学の連関、比較文明、査読無、30、pp.61-79.

西村邦行、世界にとどまる E・H・カー『歴史とは何か』の政治思想、北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編、査読無、65、pp.13-28.

妹尾哲志、国境をめぐる国際紛争 冷戦期の西ドイツとポーランドを事例として、専修大学法学研究所所報、査読無、50、p.41-52.

2015年

葛谷彩、「不本意な覇権国」？ ドイツ外交政策をめぐる論争、明治学院大学法学研究、査読無、100、pp.409-425.

板橋拓己、『アメリカの社会科学』とどう向き合うか ドイツの国際関係論（IB）の歴史と現状（1）成蹊法学、査

読無、83、pp.217-243.

三牧聖子、「孤立主義」アメリカの外交構想力 大戦間期アメリカの戦争違法化運動、立教アメリカンスタディーズ、査読無、38、pp.1-17.

劉仙姫、朴正熙の核開発と米国外交、国際政治、査読有、184、pp.30-43.

〔学会発表〕(計 14 件)

2013 年

Hitomi Yamanaka, Two Regional Ideas during the War, International Studies Association 2013 Annual Convention, 2013 年 4 月 6 日、サンフランシスコ市(米国)

小川浩之、イギリス対外政策におけるアジア太平洋 マクミランのコモンウェルス歴訪(1958 年)再考、日本国際政治学会、2013 年 10 月 27 日、朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター(新潟市)

Tetsuji Senoo, Lessons from German Policy of Reconciliation? Willy Brandt's Ostpolitik and its implications for Regionalism, Regionalism and Conciliation, 2013 年 9 月 9 日、Institute of International Politics and Economic, ベルグラード市(セルビア)

2014 年

葛谷彩、リアリストから見たトインビー：文明論的視座の今日的意義、トインビー・地球市民の会ゼミナール、2015 年 3 月 7 日、神宮前隠田区民会館(東京都渋谷区)

Seiko Mimaki, Twenty Years' Crisis in Asia-The Institute of Pacific Relations and IR, International Studies Associations, 2015 年 2 月 19 日、ニューオーリンズ市(米国)

Tetsuji Senoo, Germany's Ostpolitik and the NPT under the Grand Coalition Government, Institute of International Politics and Economics International Conference, 2014 年 9 月 15 日、Institute of International Politics and Economics, ベオグラード市(セルビア)

小窪千早、フランスの核戦略をめぐる議論とドゴールの核政策、「NATO における核共有・核協議制度の成立と運用」研究会、2014 年 5 月 31 日、政策研究大学院大学(東京都港区)

2015 年

葛谷彩、H・バターフィールドと高坂正堯の国際政治論 ドイツの知的伝統の視点

から、日本国際政治学会、2015 年 10 月 30 日、仙台国際センター(仙台市)
板橋拓己、「西洋を救え！」西独アデナウアー政権とアーベントランド運動、日本政治学会、2015 年 10 月 11 日、千葉大学(千葉市稲毛区)

小川浩之、ハロルド・マクミランのヨーロッパ統合政策、政治経済学・経済史学会ヨーロッパ統合史フォーラム、2015 年 8 月 1 日、学士会館(東京都千代田区)
小窪千早、ドゴールの核戦略と NPT~フランスの NPT 署名拒否とその背景~、国際安全保障学会、2015 年 12 月 6 日、慶応義塾大学(東京都港区)

塚田鉄也、人の移動の安全保障化と難民の保護、グローバル・ガバナンス学会、2015 年 4 月 18 日、南山大学名古屋キャンパス(名古屋市)

西村邦行、なぜ「アメリカの社会科学」に抗すべきでないか 記号としての英国学派とその限界、日本国際政治学会、2015 年 10 月 30 日、仙台国際センター(仙台市)

三牧聖子、アメリカの理想と国連 国連創設期と冷戦初期を中心に、日本国際政治学会、仙台国際センター(仙台市)

〔図書〕(計 10 件)

2013 年

板橋拓己、松尾秀哉他、ナカニシヤ出版、紛争と和解の政治学、298(216-233)

2014 年

板橋拓己、中央公論新社、アデナウアー 現代ドイツを創った政治家、240.

葛谷彩、近藤正基他、ミネルヴァ書房、現代ドイツ政治 統一後の 20 年、336(200-219)

三牧聖子、名古屋大学出版会、戦争違法化運動の時代 「危機の 20 年」のアメリカ国際関係思想、368.

西村邦行、押村高他、晃洋書房、政治概念の歴史的展開 第七巻、246(107-123)

森田吉彦、岡本隆司他、名古屋大学出版会、宗主権の世界史 東西アジアの近代と翻訳概念、399(174-206)

2015 年

小川浩之、細谷雄一他、慶應義塾大学出版会、戦後アジア・ヨーロッパ関係史 冷戦・脱植民地化・地域主義、303(93-120)

妹尾哲志、益田実他、ミネルヴァ書房、冷戦史を問いなおす 「冷戦」と「非冷戦」の境界、434(80-102)

Seiko Mimaki, Phillip Tolliday et. al, Vandenhoeck&Ruprecht,

Asia-Pacific between Conflict and Reconciliation, 293(257-278)
森田吉彦、土倉莞爾他、晃洋書房、現代政治の理論と動向、189(166-189)

宮下 豊 (MIYASHITA, Yutaka)
阿曾沼春菜 (ASONUMA, Haruna)
春名展生 (HARUNA, Nobuo)
(平成27年度より参加)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葛谷 彩 (KUZUYA, Aya)
明治学院大学・法学部・准教授
研究者番号：90362558

(2) 研究分担者

板橋拓己 (ITABASHI, Takumi)
成蹊大学・法学部・准教授
研究者番号：80507153

森田吉彦 (MORITA, Yoshihiko)
大阪観光大学・国際交流学部・教授
研究者番号：70459387

山中仁美 (YAMANAKA, Hitomi)
南山大学・経済学部・准教授
研究者番号：30510028
(平成26年逝去)

西村邦行 (NISHIMURA, Kuniyuki)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70612274

小川浩之 (OGAWA, Hiroyuki)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：60362555

劉 仙姫 (YU, Sunhe)
大阪女学院大学・非常勤講師
研究者番号：30432404

小窪千早 (KOKUBO, Chihaya)
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：00362559

妹尾哲志 (SENOO, Tetsuji)
専修大学・法学部・准教授
研究者番号：50580776

塚田鉄也 (TSUKADA, Tetsuya)
桃山学院大学・法学部・准教授
研究者番号：00551483
(平成27年度より)

三牧聖子 (MIMAKI, Seiko)
関西外国語大学・外国学部・助教
研究者番号：68579019
(平成27年度より)

(3) 研究協力者